

論文の内容の要旨

論文題目 仏領期ベトナムにおける建築と都市計画の研究

氏名 大田省一

本論文はフランス植民地時代（仏領期）のベトナム（現在のベトナム社会主義共和国）について、建築と都市計画の推移の状況を、ハノイを中心に取りあげる。ここでいう仏領期とは、1873年のフランス軍によるハノイの占領から1945年のインドシナ連邦の崩壊までの期間をさす。

分析にあたっては、フランスにより持ち込まれた建築、都市計画が、現地でどのように変容していったか、という視点を中心として論を進めていく。フランス人が植民地支配の際につくった建築が、現地の実状と直面するなかで変容していく過程とともに、建築（architecture）という概念が、フランス側に独占的に存在していた段階から、次第に現地人にも共有されていく過程を考察する。ハノイを中心とした仏領インドシナの建築、ハノイの近代都市史の通史の記述を通して、都市形成の過程と建築表現の変遷における新しい事実の発掘を目指し、その過程での文化事象としての建築設計、特に伝統建築の概念の形成過程、ベトナム人が建築を受容し発展させていく過程にも配慮して、論を進めていく。

インドシナのなかでも、ハノイは連邦首都として優先的に開発が行われた。総督府の所在地としての政治的中心、大学等の研究期間が集中的に存在したことで文化的な中心としての地位を占め、都市計画、建築の面でも活動の中心であり、インドシナの建築界の動向を最もよく反映している。ベトナム各都市で実施した「近代建築悉皆調査」でも、ハノイの近代建築が、時代的変遷を最もよく表していることが判明した。このため本論では主にハノイを舞台として取り上げていくが、適宜他の都市にも言及して、インドシナの都市、建築の状況を明らかにしていく。

本論は5章よりなる。第1章は、フランスのハノイ進攻当時から仏領インドシナが崩壊する1945年までの、建築の変遷を取り上げる。第2章では、開港地建設当初からの都市

建設の過程を取り上げる。第3章では、現地人地区の変容を取り上げる。現在「36通り地区」と呼ばれている地区は、植民地時代は現地人街と呼ばれ、王朝時代から今にいたるまで、ハノイの中心商業地区である。この地区の植民地時代の変容に関して述べていく。さらに現地人居住に関することとして、新規につくられたベトナム人地区の問題も取り上げる。第4章はフランス人のベトナム建築の調査・研究のなかで伝統建築という概念ができる過程、この伝統文化をみる視線が、街並みにも向けられていくことについて述べる。第5章では、フランスの建設事業にベトナム人が取り込まれていって、ベトナム人建築家が誕生する過程、彼らの活躍と、ベトナムの建築界で果たした役割について考察する。

第一章では、植民地期の建築家の作品とその背景・理念について考察した。

「1—1」では、入植期からの建築家の使命を中心に考察した。

「1—2」では、エブラールの建築とその理念を明らかにし、その同時代的、また近代建築史上の意義を考察した。

「1—3」では、40年代に活躍したモダニストたちの活動をのべ、その時代背景と建築表現の直接的な繋がりを明らかにした。

植民地の建築は、その歩みのなかで数度にわたって、その目指すところを変えている。

開港時の実用的建築物から、植民地の発展を象徴するような本格的様式建築へと移っていく。フランス的世界を東洋へと移植することに力が注がれる。その後は本国とは別個の文化に注目した建築家による独自の建築表現の時代、さらに気候・風土に適合した、現地事情に直面した建築をつくる時代へと移っていく。

第2章では、ハノイを中心としてフランス植民地時代の都市建設について述べた。

「2—1」では、サイゴンを進出基地としてハノイにきたフランス人が、都市を建設していく様子を描いた。

「2—2」では、本国の近代的都市計画の伝道者エブラールの業績と、その背景であり結果でもあった20年代の都市拡張について述べた。

「2—3」では、政権の求めに応じて活動した40年代の計画家達の仕事について述べた。20年代のようにひとりの天才の「神の眼」によって都市がつくられるのではなく、実業的な官僚達によって都市が建設される様子を明らかにした。

フランスによる植民地支配は、フランスによる開発の過程である、ということが喧伝されていたが、都市計画は中でもその開発の成果が人々の目につきやすい所業であった。

ハノイでの植民地都市の建設は、王朝時代の都市構造を読み換え、新たな構造体を上書きしていく作業であった。当初はグリッド街路による市街地が建設され、整備計画自体はあったものの、都市というよりは入植地の趣であった。

都市空間は時の為政者にとってはプロパガンダの場でもあり、ハノイにおいてはドゥメ

ール治下での街路空間の演出がその例である。

このような政権と都市計画の関係は、本国で誕生した、新たな都市計画の概念が広まると、より大々的に実施される。都市計画には強権的な指導力が必要であり、植民地都市はそのような条件を満たしていた。計画家の側にとっても、植民地都市はプランの実験の場となったのである。ロンとエブラール、ドクーとセルッティ、ピノーの関係は、都市計画のパトロンとプランナーの密接な関係の実例である。プランナーは、パトロンの夢のアニメーターとして活躍した。

第3章では、現地人街の植民地化後の変容と、統治する側の意識の変化と、統治される側の生活変化によって誕生した新ベトナム人地区の実際を詳述した。

「3—1」では、かつて商人街と呼ばれた現地人街が、フランスによる都市改造を経てファサードから南部まで干渉されていく様子を記述した。この過程では衛生概念が、現地人街を囲い込んでいく様子を明らかにした。

「3—2」では、現地人がその囲い込みを出て、新たな地区で新たな住宅をつくりあげていく様子を明らかにした。社会事業としてフランス人の側でも現地人住宅の問題に取り組んでいたことが明らかになった。

第4章では、ベトナムの建築の中に伝統概念が形成されていく過程と、その中での建築研究の果たした役割を述べた。

現地人街は、開港時よりフランスによる改造を受け続けてきた。街区整備の理由には、現地人の衛生状態への配慮という風にアピールされていたが、他方、フランスにとっての管理しやすいかたちへの改変でもあった。これに合わせて住民組織も再編成される。現地人街の改編は、フランスによる間接統治の手段でもあった。

衛生概念の進展自体も、現地人家屋、現地人地区を規定していった。

現地人街は囲い込みに遭うように枠をはめられたが、これも衛生概念が理由であった。

一方で現地人の側でも、時代の変化に合わせて家屋、街区の様相を変化させていく。柔軟にライフスタイルの変化に合った住宅プラン・スタイルを選択していった。

第4章では、ベトナムの建築の中に伝統概念が形成されていく過程と、その中での建築研究の果たした役割を述べた。

「4—1」では、探検趣味からはじまるフランス人の調査が極東学院の設立に結実し、そこでの調査研究でベトナムの在地建築が「歴史的記念物」という枠をはめられ対象化されていくことを述べた。ただ、ベトナム人にとっては寺院は生きた施設であり、寺院のその面をもフランスが管理しようとしていたのである。

「4—2」では、その伝統への視線が、街並みにも向けられていくことを述べた。「歴史化するシステム」は、古建築のみならず、様々なものに向けられ、そのひとつとして街並みが挙げだったのである。この街並みをみるまなざしは、衛生概念とともに、現地人街に意

識の上での枠をつくっていったのである。「現地人街」は、こうして誕生したのである。

伝統とは、須らく近代知の発明である。

植民地では、観察者としての本国と、観察対象としての現地という、明確な視線の構図ができていたため、伝統という概念も容易に浸透していったと思われる。そうして、この2者の視点はそれぞれの側に固定されていたものではない。現地人の側にも、宗主国の側の視点を宿す人々が現れてくるのである。伝統建築を訪れ、現地人街を散策するベトナム人は、当時もはや特殊な存在ではなかった。

第5章では、ベトナム人建築家が誕生するまでの背景とその制度について述べた。

「5—1」では、植民地統治システムに取り込まれながらも、基礎力をついでいった現地人の動きについて明らかにした。このような助走期間があつてこそ、民族の建築家が誕生してくるのである。

「5—2」では、現地人建築家の教育にあつたインドシナ高等芸術学院の設立背景と、その卒業生の果たした役割について述べた。植民地期のこのような動きがあつて、建築がベトナム人へと伝授されたのである。

植民地統治のなかで現地人を活用することは、20世紀初頭から実施され、建築関連では公共事業局での採用がこれにあたる。補助的な業務ではあつたが、現業部門で経験を積み基礎的技術を習得する機会があつたことは、新たな活躍の場にも備えることができたのである。

現地人官僚に建築表現の契機を与えたのは、文化活動団体のAFIMAであつた。この団体が主催した建築コンペは、フランス一辺倒であつた建築デザインにベトナム風意匠を取り入れる契機となつた。

インドシナ高等芸術学院において現地人建築家が育つまでに至つたことは、このような伏線があつて初めて可能になつたといえる。ここでの教育には政庁建築家によるフランス本国のデザインと、極東学院の建築家による在地伝統建築の2通りの建築について教えられていたことが、その後のインドシナ建築界でのモダニズムとアンナン様式の、2通りのデザインの流行につながっていく。

全時代を通じて、都市ハノイは、フランスの政策の影響を如実に反映していた。社会的背景からはいかなる建築家も逃れられないが、植民地インドシナでは、その社会の空気には本国政府のコントロールが強く作用していた。フランスは植民地の従属を最後まで求めていたのである。中央集権的に官僚建築家によってつくられたハノイの街にはそれが顕著に反映される構造になつていたのである。フランス植民地時代のハノイはまさに、フランス統治の試行錯誤の舞台だったのである。